

教材活用例(4) 「武将茶人 ～上田宗箇～」

〔小学校高学年 主題：個性の伸長 内容項目：1の(6)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—上田宗箇—について〉

上田宗箇は戦国時代、織田信長や豊臣秀吉にも仕えたことのある武士である。

生きるか死ぬかの瀬戸際にいる当時の武士にとって茶道は心を安定させるためにとても大事であった。また、茶道具は戦の交渉に使われるほど重要なものだった。

宗箇は千利休や古田織部などからお茶を習ったが、茶杓や茶碗を自ら作るなど自分なりの茶道とはどのようなものかを追究し続けた。

晩年は現在の広島県廿日市市浅原で隠棲し、お茶を楽しむ毎日を送った。上田宗箇流の茶道は武家茶道として現在まで多くの愛好家によって受け継がれている。



永禄6年 (1563年)	永禄6年 尾州星崎に生まれる。 幼名 佐太郎
天正2年 (1574年)	丹羽長秀の侍兒となる。
天正6年	織田信長に仕え初陣する。
天正13年	豊臣秀吉の家臣となる。
天正18年	千利休の百回記の茶会に参加する。
慶長6年 (1601年)	古田織部の茶会に参加する。
慶長7年	徳島藩に招聘される。
慶長10年	紀州藩に招聘される。
元和元年 (1615年)	大阪夏の陣。「敵隠れ」を作成する。
元和5年	浅野長晟に同行し広島藩に移封される。 現廿日市市浅原に隠棲する。
慶安3年 (1650年)	88歳で没する。遺言により遺骨は砕かれ 早瀬の海に投げられた。

上田宗箇の経歴

(イ) 4コマ絵

史実に基づいて経歴を整理した。そして、宗箇の生き方が表れ、人間的魅力が伝わるエピソードを中心場面とし、4場面の構成とした。

	起	承	転	結
ジ 場 面 の イ メ ー ジ				
絵 の 説 明	上田宗箇は戦国時代、織田信長や豊臣秀吉にも仕えたことのある武士だった。 生きるか死ぬかの瀬戸際にいる当時の武士にとって茶道は心を安定させるためにとても大事なものであった。また、茶道具は戦の交渉に使われるほど重要なものだった。	宗箇は、千利休や古田織部にお茶についての基礎を学んだ。 宗箇は、師匠である織部から「あなたの茶道にはどんな自分らしさがありますか？」と指摘され、利休や織部のまねではない自分なりのお茶とはどんなものか悩み続ける。	大阪夏の陣のこと。待ち伏せていた竹やぶに好みの竹を見つけた宗箇はその場で茶杓を作りはじめた。敵の攻撃の中でも悠然と宗箇の好みの茶杓を作った。その茶杓は武士の力強さ、大胆さが表れ、宗箇は自分らしさをそこに见つけることができた。	宗箇は力強さだけではなく、さらに自分らしさを磨こうとやさしさや思いやりを茶道に取り入れていった。 自分流のお茶の在り方をつらぬき、武士の茶道の「美しき」とは何かを伝えた宗箇の茶道は広島に根付き、今でもたくさんの愛好家を育てている。

イ 資料の解説

【作成の要点】

人は、その人にしかない性格や性質をもっている。自分の良さに気付くとともに、それを伸ばしていこうと努力すること、またその中で自分の短所にも気付きそれを改善していくことは、調和のとれた自己を形成するために必要なことである。

本資料は、戦国時代、広島に実在した武将茶人である上田宗箇について作成した資料である。上田宗箇流の茶道は、宗箇が自分らしい茶道の在り方を模索し続け、自分なりの茶道を確立したことにより現在まで受け継がれていることを、この資料によって考えさせていきたい。

宗箇は自分らしさがないことを師匠である織部に指摘され、自分らしさを求めて作品を作るのだが、ついに戦いの最中に作った茶杓を通して武士らしく、やさしく思いやりのある自分らしい茶道を見つけていくという物語である。

本資料により、自分の長所や短所、自分らしい個性を発見するとともに、その個性を自分らしく発揮していこうという心情を育てていきたい。

児童は自分の個性や自分らしさということを日常生活の中でいつも考えているとは限らない。したがって、学級活動で取り上げたり、各教科等の中で自分らしさや個性を発揮した場面などを意識させたりするなど事前・事後の取組が大変重要ある。

指導に際しては、戦国時代や茶道、茶道具などをイメージさせるのは難しいため、社会科での歴史学習、総合的な学習の時間等で茶道体験をしておきたい。また、自分らしさを発揮させる場としての図画工作科等との有機的な関連を図ることが大切である。



【心に響くちょっといいはなし】

上田宗箇流の茶道は現在も広島の地で受け継がれている。上田流家元である「和風堂」は広島市西区古江にあり宗箇のお茶を現在に伝えている。

上田宗箇は晩年を廿日市市浅原で過ごした。殿様でありながら村人に対して「年貢や労働に困ったことがあれば、隠さず申せ。」

「弱いものをいためつけるようなことを代官がすることは許さん。」

と、大変思いやりをもっていた。また村の行事に気軽に参加し交流するため、村人から「そうかさあ」（宗箇さん）といって親しまれた。

浅原で宗箇が3年間暮らした屋敷の周りには、青い石がごろごろしていて歩きにくい土地だった。村人はそこを通りかかった時にはいつもその青石を取り除いていた。宗箇はその青石を庭石にして立派な庭を造った。青石を持ってくる村人には一升の米を持たせたことから、「青石一升米一升」といわれ村人に語り継がれている。

宗箇の屋敷の近くの谷にどんな日照りでも枯れることのないわき水の池があった。お茶を点てるのに、また生活用水として宗箇はそれを汲んでいた。清らかな池と宗箇の人柄を重ね村人は「お手形の水」「岩船の水」といって大切にした。今でも宗箇講によって行われてきた追慕祭はこの地で行われている。

また、宗箇は庭園造りにも名があり、広島市内の縮景園は上田宗箇の作庭である。宗箇が手がけた庭園は日本各地に残されている。

ウ 資料全文

「ぶしょうちやじん 武将茶人 うへだ 上田 そうこ 宗箇」

みなさんは、上田宗箇流という茶道の流派を知っていますか。茶道というせんりのりきゅう千利休が広めたことで有名ですが、広島にはそれとは別のすばらしい武士の茶道が受け継がれているのです。

今から400年ほど前、上田宗箇という武士がいました。もとは、織田信長や豊臣秀吉に仕えたこともあり、後に芸州藩（今の広島）に迎えられ、大竹や廿日市をおさめる領主となったのです。宗箇は、体は小さかったのですが、いくさの時には勇ましい活躍をして、たくさんのほうびをもらうような武将でした。

当時、武士は、いくさのあいまに茶の湯を楽しみ、つかの間の安らぎを楽しんでいました。宗箇も茶の湯が大好きで、殿様を自分の屋敷にお迎えするときも、必ず茶の湯⁽¹⁾を点ててお迎えするほどの腕前でもありました。

宗箇はふるたおりべ古田織部という武士に茶道を習いました。織部は、信長や秀吉に仕えた有力な武士であり、千利休の弟子でもありました。織部は宗箇にお茶を伝えるとともに、宗箇の生き方にも大きな影響を与えました。

ある時、織部は自分の弟子である宗箇にこう話しました。

「千利休は静かなものに美しさを感じ茶道を作りました。私は動きのある新しいものに美しさを感じ茶道を作り上げてきました。さて、あなたの茶道にはどんな自分らしさがありますか。」

宗箇は「はっ」としました。これまで自分は利休や織部から茶道を習ってきたが、自分らしさについて考えたことはなかったからです。

「私の茶道には自分らしさがない・・・」

宗箇は大きなショックを受けました。

宗箇は自分流の茶道をもとめて、いろいろと試してみました。ちやしやく茶杓⁽²⁾を作ってみたり、花入れを作ってみたりしましたが、満足のいくものができませんでした。茶碗も職人に任せず自分で作ってみました。しかしどれも利休や織部のいいところを真似ているようで、とても自分らしさを感じることはできませんでした。

「自分には新しいものは生み出せないのではないだろうか・・・」

そう悩む日々が続きました。

ある日、宗箇はいくさに出陣しました。大阪夏の陣⁽³⁾の戦いです。

宗箇はいくさの合間に心を落ち着けようと、一本の美しい竹を見つけ、茶杓を削り始めました。いつ敵が攻めてきて命を落とすかもわからない状況の中で、覚悟を決めながら、それでも使いやすいように心をこめて一心不乱に削り続けました。

無心に削った茶杓は、直線的で、実に味わい深いものでした。そして武士の力強さ、大胆で豪快な堂々たる姿があらわされていました。

宗箇はできあがった茶杓を夕日にかかげて見上げました。その茶杓は夕日を照り返し、まぶしく輝いていました。

「そうだ!これだ!これが私らしさなのだ!!」

と、大きな声でさけびました。

そこには、利休とも織部とも違った新しい上田宗箇らしさがありました。

「私らしさとは、武士の強さをもったもの。いや、しかしそれだけではない。」

宗箇は、さらに自分らしい茶道を作ることに夢中になりました。

宗箇が作る茶碗や花入れには、武士の力強さが表現されており、無駄のない、りんとした美しさがありました。しかし、その強さの中にも使う人にやさしく思いやりのある繊細さや、自分なりの思いをこめたのでした。

宗箇は、武士としての強さと優しさを兼ね備えた生き方をもとに、新しい上田宗箇の茶道をついに、完成させていったのでした。

宗箇が戦いのさなかにつくった茶杓は「敵がくれ」という名前がつけられ今でも大切にされています。



【注】

- (1) 客を招き、抹茶^{まっちゃ}をたてて楽しむこと。また、その作法や会合のこと。
- (2) 茶道の点前^{てまき}で抹茶をすくう細長いさじのこと。素材は主として竹であるが、象牙、金属、陶器などもある。
- (3) 元和元年（1615 年）夏、徳川方が冬の陣の和議の条件に反して大坂城内堀を埋めたため豊臣方が兵を挙げ、徳川家康らに攻め落とされた戦い。

【参考文献】

上田宗嗣「茶道 上田宗箇流」（1934 年）ひろしま文庫
渡 好美「上田宗箇とその時代」（1994 年）溪水社
津本 陽「風流武辺」（2002 年）朝日文庫
矢部良明「武将茶人 上田宗箇」（2006 年）角川書店
久野 治「古田織部とその周辺」（2009 年）鳥影社
山田芳裕「へうげもの」（2005 年）講談社
季刊誌「和風」

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

各教科等での体験活動を生かした道徳の時間の展開
～体験を言葉で生かし深める工夫をした指導～

（ア）主題名 個性の伸長 1－（6）

（イ）ねらい 「そうだ。これだ。これが私らしさだ。」と叫んだ宗箇の気持ちを通して、自分の特徴を知ることの大切さに気付かせ、自分のよさを伸ばそうとする心情を育てる。

（ウ）資料名 「武将茶人 上田宗箇」

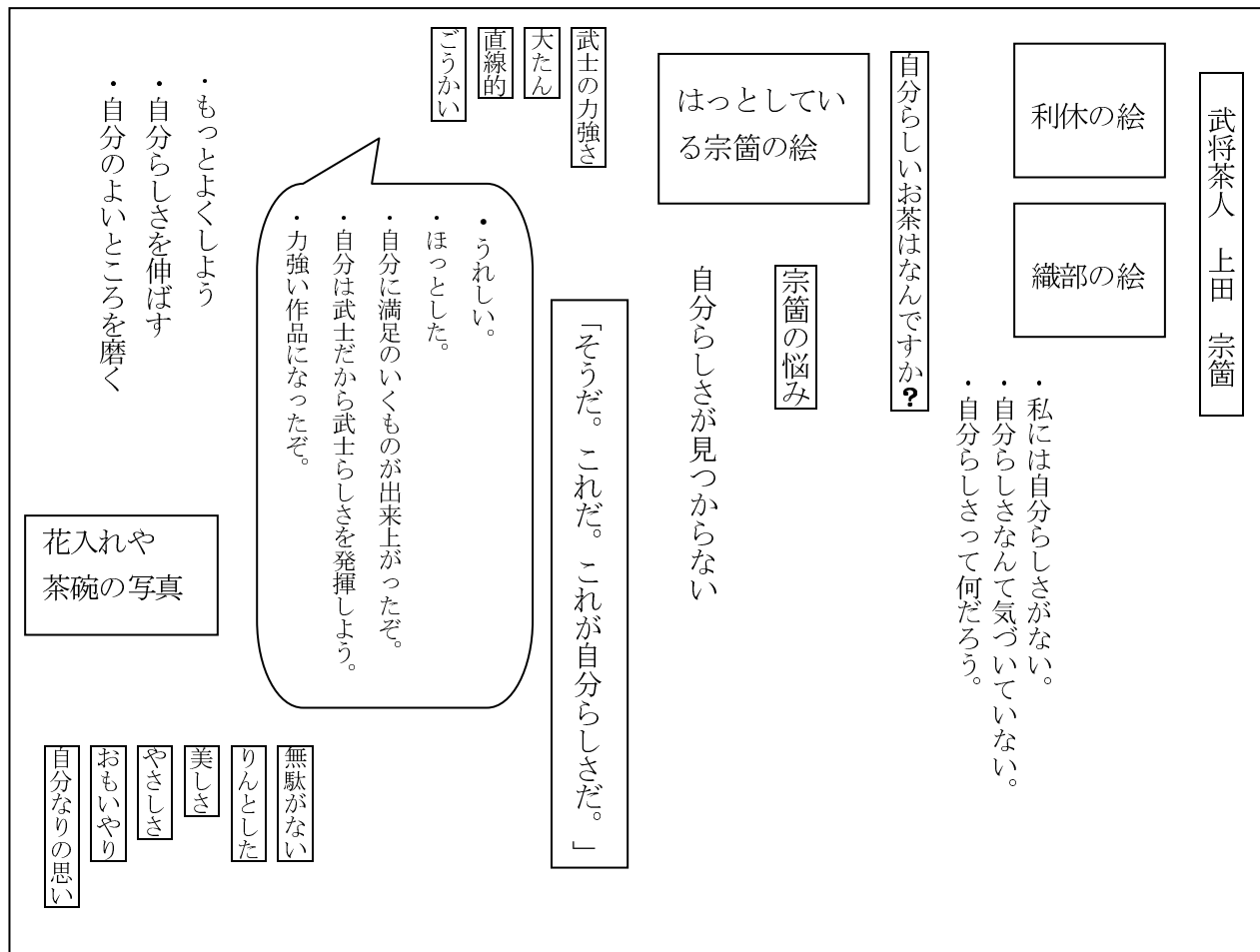
（エ）学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (評価の観点☆)
導入	1 自分の長所を交流し合う	○ 自分にはどんな長所がありますか。 ・走るのが速い。 ・サッカーが上手。 ・習字が得意。	○ ねらいとする道徳的価値への方向性をもたせる。 ○ 自分の長所を学級活動などで考えさせておくなど事前の学習と関連させる。 ○ 自分の日常を振り返らせる。
展開	2 資料前半を読んで考える。 3 資料後半を読んで考える。	○ 織部の言葉を聞いて宗箇は「はっ」としたのはどうしてでしょう。 ・私には自分らしさがない。 ・自分らしさなんて気付いていない。 ・自分らしさって何だろう。 ○ 自分流の茶道を求めているいろいろと試してもなかなか納得できない宗箇はどんな気持ちになったでしょう。 ・とてもショックな気持ち。 ・自分には無理なのではないか。 ・いくらやってもだめだ。諦めよう。 ・自分には新しいものなんて生み出せない。 ・なんとかしなければ。 ◎ 「そうだ。これだ。これが私らしさなのだ」と叫んだ宗箇はどんな気持ちだったでしょう。 ・自分に満足のいくものが出来上がったぞ。 ・自分は武士だから武士らしさを発揮すればいいんだ。 ・力強い作品になったぞ。 ・自分らしい作品になったぞ。 ・自分らしさをついに見つけたぞ。	○ 宗箇と似た体験などを想起させ自分と重ね合わせて考えさせる。 ○ 自分なりのものを追究することや真摯な態度に共感させ、ねらいに迫る。 ○ 書く活動を取り入れ、自分にも独自のものを一生けん命に作った体験がないかを思い出させる。 ○ ペアトークで考えを交流させたあとクラストークに発展させる。 ☆ 自分らしさを見つけた宗箇の心情を、自分自身の体験に照らして考え、自分なりの言葉で表現することができたか。 ○ 自分らしさを見つけないでなくもっと伸ばしていきたいとする気持ちの高まりに気付かせる。
閉	4 自分の生活を振り返る。	○ 自分らしさを見つけたのに「それだけではない。」と言った宗箇にはどんな思いがあったのでしょうか。 ・他にもっとよいものがあるのではないかなと思った。 ・もっと自分独自のものを作り続けたい。 ・さらに自分らしさを伸ばしたい。 ・自分らしさをもっと磨きたい。 ・自分にしかできないものを作り出したい。 ○ 宗箇のように自分らしいところを伸ばしていきたいと思うことがありますか。 ・大きな声が出せるのであいさつの仙人にまでになれるようにしたい。 ・習字が得意なのでそれを生かしてきれいなノート作りをしていきたい。	○ 導入で行った長所についての交流を思い出させ、気持ちや思いをしっかり引き出す。
終末	5 まとめをする。	○ 上田宗箇流第16代家元のビデオレターを見る。	○ 宗箇の生き方(個性の伸長)について3分くらいにまとめたビデオを視聴させる。

(オ) 資料分析表

資料場面	登場人物の行為・心情		主人公（宗箇）の心情	児童の意識の流れ
○当時の武士とお茶の関係。上田宗箇の紹介。 ○師匠である織部に自分らしい茶道について指摘されはつとする場面。 ○いくさの最中に作った茶杓に自分らしさを見つけたことができた場面。 ○武士の力強さ、大胆さ、豪快さ、堂々たる姿が自分らしさとわかった宗箇はまだまだ自分の個性を磨こうとする場面。	中心人物（上田宗箇） ・褒美をもらうほど勇ましい武将。 ・いくさの合間に茶の湯を楽しみ、つかの間のゆとりを楽しんでいた。 ・殿様を自分の屋敷にお迎えするときも必ず茶の湯を点てて迎えるほどの腕前。	その他の人物（古田織部） ・「利休は静かさに自分らしさを感じ、私は動きのある茶道。では、あなたの茶道にはどんな自分らしさがありますか。」	・武士の楽しみは茶の湯だな。 ・お殿様に茶の湯を楽しんでもらえるようにしっかりもてなすぞ。 ・私の茶道には自分らしさがないというのか？ ・「自分らしい茶道」とは一体何だというのだ。 ・自分らしい茶道を見つけることができるのだろうか。 ・自分の茶道を見つめるために茶杓や花入れをつくってみよう。 ・茶碗も自分で作ろう。 ・でも、利休や織部のまねをしているようだ。 ・自分らしい茶杓ができたぞ。 ・武士には力強さ、大胆さ、豪快で堂々としたものがある。それが私の茶道だ。 ・やつと自分らしい茶道を見つけたぞ。 ・自分らしさを見つめることはなんてすがすがしいのだ。 ・力強さだけではないのだ。 ・まだ武士らしさというのほかにもある。 ・やさしさと思いやりがあつてこそ本当の自分らしさだ。	・戦国時代の武士にとって茶道は大切なものだったんだな。 ・宗箇も茶の湯が好きだったんだな。 ・この前茶道体験学習をしたな。おいしかった。 ・戦国時代から茶道はあったのか。 ・自分らしさとは何かを悩んだんだな。 ・自分らしさは何かと聞かれて困っただろう。 ・自分らしさと聞かれて自分なら何と答えるかな。 ・人のまねではないものを見つけるのは大変だな。 ・命がけで作った茶杓に自分らしさを見つけたことができてよかった。うれしかっただろう。晴れとした気持ちになるな。 ・自分らしさをやつと見つけたのに、それだけでは満足しない宗箇はすごいな。 ・宗箇のように自分らしさを見つけて伸ばしていきたいな。

(力) 板書例



【板書の構成】

戦国時代の人物の人間関係を理解させるために、人物名の短冊や人物絵を活用し、児童に臨場感をもたせ、資料へのより深い理解を促す。ただし、人物絵はWeb上では公開することができない。しかし板書や印刷配布については公共性への配慮から使用の許可がある。(山田芳裕「へうげもの」講談社)

宗箇の悩んでいるときの思いと、自分らしさを見つけたときの思いを対比させるように整理することで効果的な板書となる。また、武士の力強さ、大胆さ、直線的、豪快さなど武士としての宗箇らしさを資料提示とともに板書することで、児童が宗箇の気持ちを理解するためのヒントとなりうる。

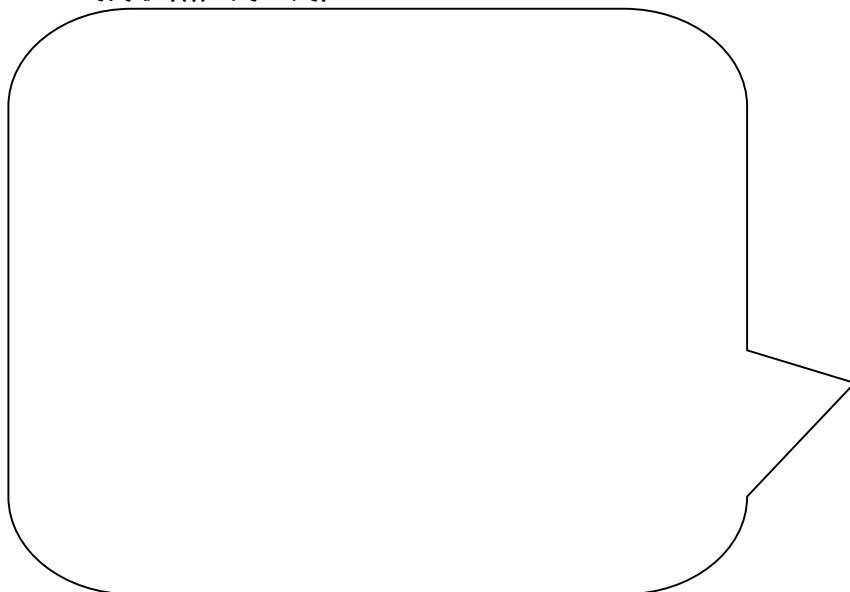
さらに、「敵がくれ」の写真や、宗箇がもっと自分らしさを磨こうと作った花入れや茶碗「さても」などの写真を提示し、現在においても大切に受け継がれていることを理解させる。

(キ) ワークシート

あしひらのまきしん うさた まいり
阿部 麻人 上田 真緒

年 組 ()

I' 「やった。いれた。いざいざいってならだ。」いって、上田真緒は
みんなを連れてきたらいい。



上田 真緒の人物絵

© 山田 秀希 講談社

II' 上田の真緒の顔の絵をいって。

① 上田の真緒の顔の絵を、たのしなうに描いてみる。

1. いって 2. 描いて 3. 描いて 4. 描いて

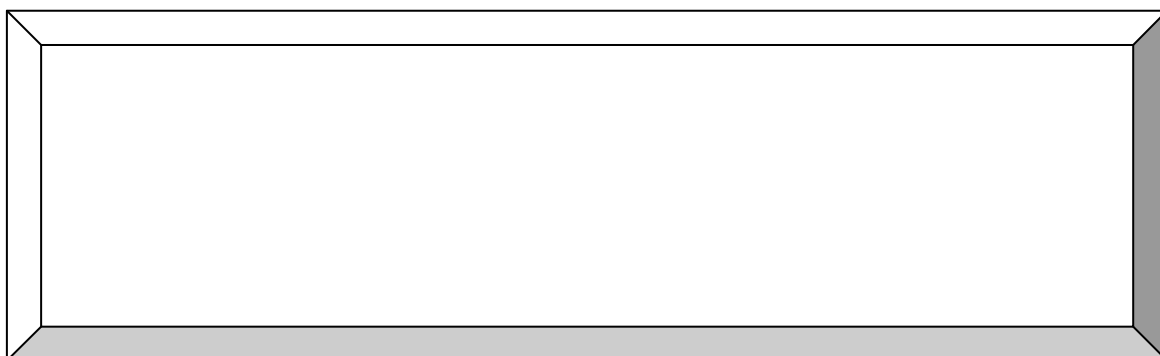
② 上田の真緒の顔の絵を、たのしなうに描いてみる。

1. いって 2. 描いて 3. 描いて 4. 描いて

③ 上田の真緒の顔の絵を、たのしなうに描いてみる。

1. いって 2. 描いて 3. 描いて 4. 描いて

III' 上田の真緒の顔の絵をいって。



(2) 活用のポイント

本資料は、戦国時代、広島に実在した武将茶人である上田宗箇について作成した資料である。上田宗箇流の茶道は、宗箇が自分らしい茶道の在り方を模索し続けたことによって現在まで受け継がれている。

本資料により、自分の長所や短所、自分らしい個性を発見するとともに、その個性を自分らしく発揮していこうという心情を育てていきたい。

児童は自分の個性や自分らしさということを日常生活の中でいつも考えているとは限らないため、学級活動など各教科等の中で「自分らしさ」や「個性」を発揮した場面などを意識させたりするなど事前・事後の取組が大変重要ある。

ア 発問の工夫

人間としての弱さを吐露する宗箇を自分に引きつけて考えさせたい。そのために、まず、自分らしさがないことを、師匠である織部に指摘されてはっとする宗箇に視点をあて、なぜはっとしたのかということから、自分らしさについて意識したことのない宗箇について考えさせたい。そして、自分らしさを追究しようと焦る宗箇の深い悩みをとらえさせることにより、中心発問へと展開していきたい。

そして、自分らしさを発見できた宗箇の心情を考えた中心発問をはさみ、「それだけではない」といってやさしさや思いやりなど自分のよさを伸ばそうとしていく宗箇の心情に気付かせていく発問構成とした。

イ 言語活動の工夫

話し合い活動においては、児童一人一人が自分なりの意見をもつように、独自のものができ上がり満足する宗箇の気持ちをワークシートに書かせ、時間をとってじっくりと考えさせたい。その後、隣の児童とペアトークをさせ意見交流をさせる。そしてクラストークへと発展させるようにしていく。さらにそれらを伸ばしていこうとする宗箇のその後の生き方を考えさせたい。

ウ 導入、終末の工夫

導入での長所の交流では学級活動での事前の学

習でアンケートをとったり、長所について話し合わせたりしておくなどして、導入がスムーズに行くよう心がけたい。自分の長所に気付かせそれをどのように伸ばしていきたいかを考えさせることで自分とかわらせていきたい。

その際、長所をクラスの友だちの前で発表し認めあえるような学級経営を日頃からの充実させておくことは言うまでもない。

終末では上田宗箇流 16 代家元の上田宗問氏のビデオレターを見せ、個性に気付き発揮することによって 400 年間、今も続いている上田宗箇流の長い武家茶道文化について理解を深めさせる。

(3) 授業の実際—児童生徒の反応を踏まえて—

ア 発問の工夫

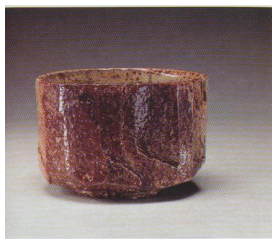
展開前段では、宗箇が織部から自分らしい茶道とは何かと問われ、「はっ」とし、何とか自分らしさを探そうとする宗箇の深い悩みをしっかりと考えさせておかねばならない。その際の発問は「自分流の茶道を求めているいろいろ試してもなかなか納得できない宗箇の気持ち」を問い、悩みの深さや焦りを出させておくようにする。

展開後段での中心場面では、戦いの最中でありながら自分らしい茶道について発見する宗箇の喜びを通して、自分の特徴を知ることの大切さに気付かせ、自分のよさを伸ばそうとする心情を育てようとしている。自分らしさがないという悩みの深さと、自分らしい茶杓ができあがった時の喜びや爽快さとの気持ちの違いをとらえさせねらいにせまる。

児童の反応は次のような意見が出された。

- ・戦いも忘れ茶杓を作ったのだから、できたときは晴れ晴れし、爽快感でいっぱいだろう。
- ・人まねではなく自分らしさが見つかったのだから興奮しただろうな。
- ・何をやっても人まねになり、焦っただろう。無心に削ることで自分らしさが見つけれられてうれしかったと思う。
- ・自分の生き方に合っている力強さが伝わってく

る茶道を見つけられてすがすがしい気持ちになったと思う。



さらに、できあがった喜びがあるのにもかかわらず「それだけではない」という宗箇のさらなる自分らしさの追究について問いかけ、もっと自分を伸ば

していきたいとする高い価値に深めさせる。

児童のワークシートには以下のような記述が多かった。

- ・宗箇が自分らしさを見つけ、さらに高めようとしたように、新たな自分らしさを見つけ高めていきたい。

自分を振り返る場面では、宗箇と自分とを重ね合わせ、導入での長所の交流を通して、気持ちや思いを引き出し自分のこととしてとらえることができたものと思われる。

イ 言語活動の工夫

導入では価値への方向付けをするために、自分の長所を発表させた。児童はお互いの長所をよく知っており友だちの長所を認め合いながらあたたかい雰囲気で行うことができた。

話し合いにおいては、織部に自分らしさとは何かと指摘されたとき「はっ」とする宗箇の気持ちを自分も宗箇と同じような体験がないかを問い、自分と関連させながら発表させるようにした。

中心発問ではワークシートに書く活動をした上で自分の意見と友だちの意見を比べながらペアトークを行い、話し合い活動に入った。自分と同じ意見や意見を聞いてなるほどと思った事などを絡めながら発言することができた。

ウ 終末の工夫

終末では、上田宗箇 16 代家元の上田宗問氏からのビデオレターを見せ、宗箇の独自性があったからこそ、広島に根付き発展してきたことを理解させる。実際に 16 代目が自分たちへのメッセージを伝えてくれることで 400 年の歴史ある上田宗箇流の茶道が脈々と受け継がれていることを実感する

ことができた。

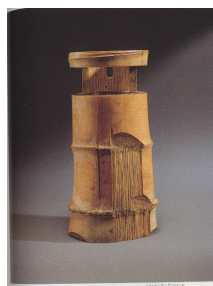
(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

総合単元的な道徳学習を展開することによって、有機的な関連としての効果が期待できる。

導入において価値への方向性をもたせるために、自分の長所を交流させるなどして雰囲気作りをしていく。

導入では、学級活動等の事前学習において自分の長所について考えさせるような活動を仕組むなどして、道徳の時間の導入がスムーズに行われるようにしておきたい。

また、資料の理解を図るために社会科での歴史学習を踏まえ、登場人物の人間関係を捉えさせておくことは必要なことである。また総合的な学習の時間での「日本文化再発見」で茶道の体験をさせておいたことは非常に効果的であった。その際、茶杓や茶碗など茶道具についても触れておき、茶道への関心と理解を持たせておいた上で、授業にはいることが重要である。また、5 年生での体験活動で行った「宗箇山」への登山の様子を写真で提示し「宗箇」という名前を意識させた。



たい。

道徳の時間の中で体験を引き出すために、図画工作科等での作品作りや国語科での作文など、個性を引き出す学習に取り組んだことを伏線にして学習を展開できるようにし

(5) 心のノートを活用

「心のノート」P. 32 からは「自分を見つけみがきをかけよう」という項目になっている。よいところや自分を変えたいところなどを書き込むようになっている。事前に自分のよいところを探して書いておき、事後「自分向上プロジェクト」を作成するような取組が考えられる。キャリアノートとの関連を図ることも可能である。